2025-2026
第2760地区　豊橋ゴールデンロータリークラブ
WEEKLY
Rotary Club of Toyohashi -Golden
例会場
ロワジールホテル豊橋　TEL.0532-48-3131
事務局　豊橋市藤沢町141
ロワジールホテル豊橋本館9階　926号室
TEL.0532-35-9973　FAX.0532-39-3743
http://www.toyohashi-golden-rc.gr.jp
email　golden@toyohashi-golden-rc.gr.jp

RIメッセージ	地区方針	クラブ方針
フランチェスコ・アレッツォ会長	鈴木康仁ガバナー	神谷馨会長
UNITE FOR GOOD	ともに学び、ともに地域社会に貢献しよう!	新たな時代へ 理想の未来への挑戦 環境変化に対応し、より魅力的なロータリークラブへ

第 29 回(通算 1733 回)例会報告	令和 8 年 2 月 13 日(金)	フォーラム「国際奉仕」
出席報告	総会員数６０名(計算会員数５３名) 欠席１８名 出席率６６．０４％　前々回修正出席率 86.54%	
歌／会場	小さな世界	会場：ロワジールホテル豊橋　30F「ﾙ･ﾓﾝ」12:30～

会長の時間

神谷　馨会長

皆さまこんにちは。先週の NPO 法人 ABT 豊橋ブラジル協会事務局長仲宗根ギリェールメ寛実氏のお話をお聞きし、豊橋に多く居住されている日系ブラジル人の方々の現状を知る事で地域の多文化共生の未来について様々な取り組みが必要な事が理解できたと思います。
近年の日本は在留外国人が大きく増加しています。少子高齢化が進む日本社会にとって経済の発展や社会保障の維持継続には外国人の存在は欠かせない重要な問題です。しかし同時に欧米などの先進国では移民増加に伴い、治安の悪化、伝統文化の衰退などさまざまな問題が生じているという事実があります。事務局長のギーさんによると教育の不足により能力を活かせない若い人々の現状を改善する事がとても大切な事だとの考えをお聞きしました。
私は 30 年近く前に地元の岩田小学校 PTA 会長をさせていただいた時に通訳のブラジル人ボランティアの方から「日本とブラジルの文化、生活習慣の違いが多くのトラブルを起こしています。コミュニケーションの機会を増やす事で互いを知る事が改善には大切だと思います」との話をお聞きしました。また、小学校に通学する子供たちが親に送ってもらわなくても安全な日本社会にとても驚きましたとの話も強く印象に残っています。
日本人と外国人が共に幸福な社会を目標に今後のロータリークラブとしての意見交換が出来ればと思います。
豊橋市、浜松市は全国有数の在留外国人の多い地域です。私たちロータリークラブの国際奉仕が未来の多文化共生に役立つよう闊達なご意見をよろしくお願いいたします。

ロータリーの友読みどころ

伊藤角栄雑誌委員

内容に移る前に表紙のご紹介をさせていただきます。
横組表紙は川崎南 RC の村田さんの作品です。縦組表紙は東京立川 RC の田島さんの作品です。双方とも素晴らしい作品だと思います。
絵画を得意とする会員の方はぜひ、投稿をお願いいたします。
それでは横組から参ります。2P から 3P フランチェスコ・アレッツォ RI 会長メッセージです。行動が私たちを定義する題し、1 月に開催された国際協議会でのオラインカハキーム・ババロラ RI 会長エレクトのメッセージを引用されております。「持続可能なインパクトを生み出そう。2 月は平和構築と紛争予防月間です。今こそインカ会長エレクトの呼びかけを真の変化へとつなげる絶好の機会です。」平和への第一歩は「知ることです」「暴力、貧困、食料不安の連鎖を断ち切り、平和を根付かせることを目指しています」「恐れが蔓延する世界において、ロータリーは中途半端な対応やうわべだけの言葉で満足してはなりません。私たちが真に「行動人」であるなら、その名の通り、行動こそが私たちを定義するべきです。ともに、世界で、地域社会で、そして私たち自身の中に、持続可能なインパクトを生み出していきましょう。」
P5～P12 特集平和構築ト紛争予防月間　平和を願う言葉の記録　「ある少年通信兵の沖縄戦」と題しコザ RC 名誉会長　諸見里康弘さんの掲載記事です。「焼け落ちる二中校舎」「親にも相談せずに入隊」「アメリカ軍の上陸」「味方同士の殺し合い」「左足負傷」「歩けなければ自決」「先発隊と合流」「迫りくるアメリカ軍と地獄の壕内」「アメリカ兵に囲まれる」「ハワイでの収容生活」「収容所に母の便り」「思いがけない贈り物と沖縄への帰還」最後にこの文章を読んだ皆さんへの中から抜粋したものをご紹介いたします。皇国のため、本土防衛のためと参戦し、老人や女性子供までが巻き込まれ、敗戦の結果、沖縄戦だけで訳 20 万人が犠牲になりました中学校の職員、生徒は約 260 人が従軍しその 80%近くが帰らぬ人となりました。あくまでも民主的に、争いのない世の中を作ってほしい。それが何百万人もの戦争の犠牲者に対する、われわれ日本国民の義務じゃないかと思います。必ず、平和な世の中を作ってくれることを希望します。
P14～17 ロータリー研究会の記事が掲載されております。ご一読をお願いいたします。P20～21　RI 会長が日本のロータリー平和センター来訪の記事が掲載されております。
P22～31　参加してよかったポリオ根絶活動に生地が掲載されております。

P32～33　会員が求めることについて会員の声を聞き積極的参加を促すの記事が掲載されております。
P34～36　千　玄室さんの掲載記事です。
P51　第 2760 地区　地区大会略報が掲載されております。
　縦組に参ります
P2～6 これからの時代に求められる不登校支援についてと題し医学博士の斎藤先生の記事が掲載されております。
P7～10　この人を訪ねて　呉 RC の日下美穂さんの意気地が掲載されております。「呉～広めた減塩食ムーブメントです
P14～15　友愛に広場が掲載されております。
以上　ロータリーの友読みどころでした。

フォーラム「国際奉仕」
ー当クラブの国際奉仕についてー

鬼頭秀幸ラーニング委員長

皆さま、こんにちは、本年度ラーニング委員会委員長の鬼頭です。本日は国際奉仕委員会フォーラムということで、挨拶をさせていただきます。私は先週休んでしまったので、ここでお話するのも心苦しいのですが、お役ですので務めさせていただきます。
国際奉仕活動というと私的にはとても興味深く、ロータリーらしい活動ができる機会だなあといつも感じています。
今まさに日本は、人手不足により外国人に協力してもらわないと経済が回らない状況になっています。特に今回は豊橋市内で生活者が多いブラジル人に焦点を当てて、ABT 豊橋ブラジル協会の代表の卓話を聞くこととなったようです。私も日系ブラジル人に友達がいますし、弊社にも社員が一人いますので、ほんとに聞きたかったです。
今回担当の飯野委員長も国際奉仕委員会が地域の国際社会を知り国際交流を行うことを目的に活動しているため、うってつけの講師の例会であり、とてもやりがいを感じたのではないでしょうか。

さて、今回のフォーラムも前回同様、グループディスカッション形式で話し合ってもらうフォーラムです。少しだけファシリテーターの参考になればと思い、地区でもらった資料からの抜粋を説明します。「ファシリテーターとは３人寄れば文殊の知恵を実現する 4 人目の役割です。ファシリテーターを和訳すると（協働を）促進する人、円滑にする人です。」
もう一度言います。「ファシリテーターとは３人寄れば文殊の知恵を実現する 4 人目の役割です。ファシリテーターを和訳すると（協働を）促進する人、円滑にする人です。」
それでは皆さま、テーマに沿って、楽しく自由な意見を言って、限られた時間を有意義なものにして自らの今後の活動に生かしてください。よろしくお願いいたします。

フォーラムリーダー　飯野益通国際奉仕委員長

先週に引き続きフォーラム国際奉仕を企画させていただきました委員長の飯野です。フォーラムの趣旨と議題、あと資料が多いので説明をさせていただきます。
本フォーラムの趣旨は、クラブ方針「新たな時代へ　理想の未来への挑戦」のもと、平和構築と紛争予防月間の推進に取り組む一環として、会員同士が地域の国際社会・多文化共生について話し合い理解を深める機会となることを期待します。
一つ目の議題では先週の例会の感想や、会員各自が普段感じている身の回りの多文化共生について意見交換してみてください。　※前例会でも用意させていただいた講師 仲宗根家の歴史資料も参考にどうぞ。
また、二つ目の議題では当クラブの国際奉仕活動の歴史を振り返りながら、これからの国際奉仕活動はどのようになってゆくべきかを皆様で話し合っていただきたいと思います。　※過去の卓話・フォーラム・WCS、3 枚の記録表を用意しましたので参考にご覧ください。なお、WCS につきましてはわたしも当時は会員ではなくわかりかねますので各テーブルで経験豊富な会員の皆様の助言をいただければ幸いです。

１番テーブル　　**札木聖巳会員**

ファシリテーター：飯野会員
書記：札木会員
メンバー：神谷会長、髙橋幹事、青山会員、飯野会員、札木会員

①2 月 6 日国際奉仕担当例会の乾燥や会員各自が普段感じているこの地域の多文化共生について
青山会員より
日本人の人口は減少している中、私たちの建設業では協力施工店さんなど現場では、当たり前に外国人の方が多く働いていて、一緒に仕事を進めている。日本は島国で、大陸続きの方々と違い独立した文化であり、なかなかその日本人に溶け込めるか？何を話せるか緊張感の中にいて、昔は外国人の方は少なかったが、数十年経った今はそのお子様たちも増えてきた中で、いつまでも日本のルールとして外国人は外国人という考え方をやっていくのか？日本で生活しているのに戸籍だけで日本人と違うルートの扱われ方や、我々日本人同士で話し合ってもなかなか気づかない。法律を含め区別という部分で振り分けられていることを、先日の講演で知った。今は外国人の方なしでは仕事もできない中で、日本人がもっと広く受け入れる教育現をふくめ私たちが変わっていかないといけない。日本人の誠実さや道徳感や暴動を起こさないような世界から見ても安心安全な国で、教育を小さい頃から行うべきと感じた。

飯野ファシリテーターより
外国に移住したことが無いからわからないが、親の世代で何か理由があって来ているはずで、それを聞いてあげないといけないと思う。

青山会員より
それを小学校や中学校で思い浮かぶかというと難しく、教育で強制的な考えでなく、自然体で教えていくべきだ。

飯野ファシリテーターより
建築の現場は技能実習生ではなくて、こちらに住んでいる方が多いのか？

青山会員より
住んでいる方も一部いますが、ほとんどは 3 年などで帰られてしまう。やはり多くの事業主は「労働者」として扱っていて、次の世代や次に来てくれる方がいなくならないか。

札木会員より
先ほど飯野委員長よりあった、技能実習生は我々も「外国人」であり「労働者」として見てしまっていた。ただ、技能実習生は期限付きの滞在である一方で、先日講演で伺った日本で生まれて育った 2 世までも、国籍を与えていない「外国人扱い」であったことや、就学義務もないことや、満足日本語も勉強させてもらえず育ち、就職もしっかりできていない現実を知った。文化が違えども、国として変えてかないといけないと初めて感じた機会だった。

髙橋幹事より
先日の例会の前に仲宗根さんと話す機会があり、あれほど好意的で講演してくれたけども、ブラジル系の方々は日本の方向性に心配し、動向に注力しているとのことで、本当は心の中でそう思っていたと思う。牛川エリアは外国人が比較的少ない地域と認識で、普段はあまり接することはない。牛川小学校で評議員を年 3 回実施する中で、授業風景見学の時、外国人が個別に授業を受けている様子を見ることがある。外国人の問題に対し市も教育委員会も努力してくれていると思う。小学生（娘）の親向けの案内が e メッセージ（アプリ）で来るときも、重要なお知らせは、ポルトガル語とタガログ語、英語、ネパール語、ひらがなで案内が届く。但し、それ以外の資源回収や学級閉鎖の案内は日本語のみなので、どこまで全員に認知できているのか少し心配になる。

神谷会長より
同じく豊川中で評議員をやっていた時、豊川中は既に外国人の方々の受け入れ体制が出来ていて、クラスの子たちは日本の教育を受け、だんだん慣れてきているが、逆に親が日本に馴染むのに時間がかかっているようです。今の子供たちが育って大人になれば、その問題も中和されてくるか。もう一つは、最初に親は 5 年など短期を前提で来ているので、子供たちの日本での教育にそんなに投資もしていない。でも残りたい時に中途半端になり、高校の環境に追いつかず、ブラジルの学校へ行くことになっている。それが問題となっている。そういったところを少しでも勉強できる環境にしていけば、もっと社会で活躍できるはず。また、日本の社会に以前は朝鮮や韓国の方も同じように来て、今では韓国系の方は日本人と変わらない仕事もできるようになっている。日本の社会で、日本人は視力検査や聴力検査をしてもらえるが、ブラジルの学校は今はやってもらえない。社会が差別していることが問題。

飯野ファシリテーターより
仲宗根さんと、委員長になって 10 回くらいお話ししていて、日本に 15 歳に来て彼は沖縄の両親から生まれた完全な日本人。しかし、ブラジルに渡り、純潔の日本人ですがブラジル国籍です。国籍の選択を迫られ、まだ独身ですが悩むことが多々ある様子でした。
豊橋や豊川に EAS というブラジル学校があり、日本の学校に通えない方が行っていて、校長先生も日本語しゃべれないほど。仲宗根さんが気にしていたのは、やっぱりそこで壁が出来ていて、健康診断や視力検査が出来ない環境であることの相談があり、神谷会長に相談しているところです。
子供たちに負担をかけずに日本で暮らしていける、受け入れる体制をつくってかなくてはならない。かといって将来ブラジルに帰って生活できるとすると、それも不安ばかりで出来ないという意見が多い。以前豊橋市と赤十字で 2 年間検査をしたが、いろいろな国籍の方が希望され、無くなった。やはり健康は目が一番大事で、検査は必要。

②豊橋ゴールデン RC の国際奉仕はどのようになってゆくべきか　ロータリアンの視点で見た意見を交換しよう。
飯野ファシリテーターより
WCS といって、当時はフィリピンなどの現地へ出向いていたが、現在は例会に講師を呼ぶ程度になった。途中コロナがあったりそこまでの活動が出来ていない。

神谷会長より
景気が良かったということもあったが、実際に支援活動をしてきたが、思うほど役に立たなかったことや、お金がよそに流れたり、持って行った物が他に転売されてしまったり現金化されたりなど、直接の支援はせずに必ず向こうのロータリーを通して実施する方向に変えていった。

飯野ファシリテーターより
今回周りにもブラジルの方も多く、知り合いを通じて繋げてもらったが、毎年何を国際奉仕のテーマにするか、何を継続するか、皆さんどうなのか聞いてみたかった。

青山会員より
　たまたま 3 年海外に行っていただきましたが、その時アクションして戻って来れるけども、そのあと継続的には難しいと思う。日本も国内の人口が減り、ますます同じ人間として、同じ国土の中で生活している人間として、外構人と日本人がその中に学校とした一つの仕組みの中にもその問題があり、一歩でた社会でも各領域があり、それぞれのゾーンの課題と問題点を見える化して着眼点として、今回の飯野さんテーマをきっかけにブラジル人だけでなく、日本国籍を選んでいただける状況にするなど。移動だけでなくここで根を下ろして深堀りしてい

くのもいいかと思う。なかなか海外でエネルギーを使って継続的に続けることは難しい。

髙橋幹事より
今回飯野さんのブラジル協会さんのについて、我々も内容を理解でき、そして神谷会長が目の検診について職業奉仕することになったことは一つの成果かと思います。今後は他の国籍の方の他の悩みがあれば、我々建築業界が出来ることもあるかと思います。奉仕の第４部門である国際奉仕は、書物など読むことや通信を通じて、さらには、他国の人々を助けることを目的としたクラブのあらゆる活動やプロジェクトに協力することを通じて、他国の人々とその文化や習慣、功績、願い、問題に対する認識を培うことによって、国際理解、親善、平和を推進するために、会員が行う活動からなるものである。まずはこの地域で住に暮らす外国人の方々におかれている状況を把握し、先ずは理解することが重要で、親善、平和を推進する民にできることを考えることから始める。その後、会員一人ひとりが行動・活動に移しやすい環境を整える。

飯野ファシリテーターより
以前約 20 年前にブラジル協会から竹田委員長の時に話を聞いている。活動を何かしている。

青山会員より
市役所でその時の対応履歴など詳しいことが分かると良いかと思う。

２番テーブル　　鬼頭秀幸会員

メンバー
村松（ファシリテーター、）鬼頭（書記）、伊藤（角）、山口、松島、の５名

① ２月６日国際奉仕担当例会の感想や会員各自が普段感じているこの地域の多文化共生について意見を交換しよう
・日経ブラジル人の住みやすい環境をつくりたい
・たまたま豊橋はブラジル人が多いが、他の国籍の人々もいるので、どこの国であろうが交流していけばいい。
・国によって、価値観が違うので、理解することは、難しいがコミュニケーションをとりながら、日本のルールを守ってもらうしかない。

② 豊橋ゴールデンRCの国際奉仕はどのようになってゆくべきか、ロータリアンの視点で見た意見交換しよう。
・日経ブラジル人が多いので、交流しやすいと思いますが、国籍を問わず、交流する場を設けて、触れ合う機会を増やしていけば、日本の文化やルールを理解してもらいやすいと思います。（国際交流協会との交流とか活用すればいい）

３番テーブル　　後藤浩司会員

・普段から外国人や日系ブラジル人を雇用している側として、経営側と顧客が受ける感覚の違いを感じ、多文化共生の考えは、日本の一般市民に届いているのかと日々感じている。
・豊橋市でもイマージョン教育を通して外国語の壁を幼い時から取り除いていく必要があると思う。
・文化とは、教育であり多文化共生を実現するためにもルール整備が必要である。
・育った国や環境が違ったとしても生きていくことは、根本的にはどこの国でも同じ事でありこれを受け入れることが、多文化共生につながるのではないかと考えている。
・今後の日本は、外国人の労働者を、より頼らなければ、成り立っていかないことを鑑み多文化共生をより進め日本の発展をともに進めていかなければならないと感じている。
・外国に行き寄付・援助や奉仕をするのも大事であるが、今後は、日本に居ながらロータリーが考える国際奉仕活動とは、というものをより考えていくべきだと感じている。

４番テーブル　　宮川嘉隆会員

一番目の題目
「国際奉仕例会（ブラジル日系人の卓話）の感想および多文化共生について」
今回の国際奉仕例会では、日系ブラジル人の方のお話を聞きながら、日本に住む外国人、特にブラジル人の方々の現状について、改めて考えさせられる時間となりました。日本ではこれまで、外国人の方を「働き手」として受け入れてきたけれど、生活者としてどう支えてきたのかという点については、十分だったのだろうか、という声が上がりました。言葉や教育、社会保障の問題が後回しになり、長く日本で働いてきたにもかかわらず、老後の生活が厳しいという現実があることも、改めて知ることになりました。
また、ブラジル人と聞くと「明るくて陽気」というイメージを持っていたが、実際には、うつ病や不安障害、自殺といったメンタルヘルスの問題を抱えている人が 少なくない、という話には驚かされたという意見が多くありました。お金や仕事の支援だけでなく、心の部分に目を向けることも大切なのではないか、という話が印象に

残りました。
豊橋にはたくさんの外国人の方が暮らしていますが、身近にいながら、これまであまり深く知ろうとしてこなかったのではないか、という反省の声も聞かれました。多文化共生は国や行政の制度の問題でもありますが、まずは私たち一人ひとりが、国籍や文化の違いを意識しすぎることなく、同じ地域で暮らす仲間として、思いやりをもって接することが大切なのではないか、という意見で話はまとまりました。

二番目の題目

「豊橋ゴールデン RC の国際奉仕の在り方について」

二番目の題目では、豊橋ゴールデン RC として、国際奉仕をどう考えていくのかについて、率直な意見交換が行われました。まず話に出たのは、国際奉仕の主役はクラブという組織ではなく、会員一人ひとりではないか、という点でした。活動を通して何を感じ、何を学ぶかが大切なのではないか、という考え方です。
国際奉仕というと、どうしても海外での支援活動を思い浮かべがちですが、それだけが国際奉仕ではありません。海外での活動には大きな意義がある一方で、誰もが継続して関われるわけではない、という現実的な意見もありました。その中で、豊橋という地域に暮らしている外国人の方々に目を向けた活動も、身近で取り組みやすい国際奉仕の形ではないか、という話が多く出されました。これまで行ってきた留学生と教員の交流会やフェアトレード、海外支援事業についても、「続けること」そのものより、活動をきっかけに会員が考え、学ぶことに意味があるのではないか、という振り返りがありました。国際奉仕に決まった形はなく、無理のない活動を通して、奉仕の心や人を思う気持ちを育てていくことが大切なのではないか、というところで話は締めくくられました。

５番テーブル　　青木一臣会員

① ２月６日例会の感想・地域の多文化共生について

■ **現状認識**
- 豊橋ではブラジル系を中心に外国人住民が生活者として定着しており、約６割は日本に生活基盤を持つ「生活者」。
- 言語の壁や教育機会格差により、高校・大学進学や安定就労に影響が出ている。
- 生活不安やメンタル面の課題（自殺問題等）も深刻。
- 言語圏ごとの集住や日常接点不足が分断を生みやすい。

■ **課題の本質**
- 短期的支援ではなく、教育・言語支援を軸とした構造的対応が必要。
- 「受け入れ」だけでなく、日本文化の尊重と段階的な同化支援のバランスが重要。
- 世代間で多文化への理解に差があり、学校から社会への移行期が分断の転換点。

■ **方向性**
- 子ども期からの日本語支援と共生教育が中長期的な鍵。
- 高頻度・低負荷な交流機会の創出が偏見緩和に有効。
- 明確なルールと相互理解を前提に、職場・地域での実践的対応が必要。

---

② 当クラブの国際奉仕の今後の方向性

■ **これまでの整理**
- 海外支援（WCS 等）は実施経験があるが、透明性・継続性の課題から停止。
- 理念は「世界平和に資する交流と奉仕」。

■ **今後の考え方**
- 海外支援と国内支援の両立を視野に入れつつ、まずは足元（地域の生活者支援）を優先。
- 単発事業ではなく、継続可能な枠組みづくりを重視。
- ロータリーは前面に出るのではなく、実行主体を“支える立場”として関与するのが現実的。

■ **検討事項**
- 外国ルーツ児童への言語支援モデルの具体化。
- メンタルヘルスや生活不安への導線整備。
- 市や国際交流団体との役割分担と重複回避。
- 支援の透明性・評価指標の明確化。

総括

地域の多文化共生は「理解促進」だけでは不十分であり、教育・言語支援を中心とした生活基盤の強化が不可欠。当クラブの国際奉仕は、理念先行ではなく、地域の実態に即した継続可能な支援設計へ転換するべき、との認識で一致した。

６番テーブル　　鈴木雅善会員

国際奉仕のあり方と多文化共生に関する討議：過去の活動の振り返りと今後の方向性

ロータリークラブの会合において、過去の講演会や国際奉仕活動（WCS、救急車寄贈等）を振り返り、その反省点を議論しました。その結果、今後の国際奉仕は、海外への大規模支援から、地域在住の外国人との交流を主軸とした「身近なところからコツコツと」行う活動へ転換すべきであるという方向性で意見が交わされました。

過去の講演会と多文化共生に関する個人的見解

議論は、先週開催されたブラジルに関する講演会への感想から始まりました。Speaker 2 は、ブラジル出身者が直面する困難や PR 活動を期待していたものの、内容は歴史年表をなぞるだけであり、感情移入できず記憶に残

らなかったと批判的な意見を述べました。これに対し Speaker 1 も、講演内容が事前に予想した通りだったと同意しました。

この話題をきっかけに、各メンバーが普段から考えている多文化共生について見解を共有しました。配偶者がフィリピン人である Speaker 1 は、自身の生活が既に多文化共生の実践であり、「仲良くやれれば良い」という自然な感覚を持っていると語りました。また、過去に海外で 3 年間生活した経験から、相手を理解しようと努め、まずはお互いを知ることが重要だと述べました。

一方で Speaker 2 は、自身の会社でフィリピン人技能実習生を雇用しているものの、雇用主と被雇用者という立場がフェアな交流の妨げになっていると感じていることを明かしました。その上で、今後のグローバル化社会では、日本人も積極的に外国語を学び、異文化を理解する必要があると主張。文化への適応は訪れた側が行うべき世界のルールであり、そのためには自ら積極的に働きかけ、コミュニケーションを取ることの重要性を強調しました。

また、講演会の講師が DNA は日本人でありながら国籍はブラジルという特殊な経歴（ブラジルの広大さゆえに出生届が提出できずブラジル国籍となった）を持つ人物だったことにも触れられましたが、その話も期待したほど響かなかったという感想が述べられました。

国際奉仕プログラム「WCS」の経緯と過去の海外支援活動

国際奉仕プログラムである WCS（World Community Service）の歴史的経緯と、クラブが関わってきた具体的な海外支援活動について説明がなされました。WCS は元々、アジア地区のロータリークラブが他国のクラブと連携して行う事業でしたが、かつては地区へ 10 万円を拠出し、その後の資金の使途が不透明になるという問題があったと指摘されました。

この反省から、クラブは単独で WCS 事業を行う方針に転換し、活動を継続してきました。具体的な活動事例として、フィリピンのマニラ・ロータリーからの依頼を受け、救急車を寄贈した経験が語られました。予算 20 万円の中で 25 万円の救急車を値切って購入したことや、輸送費は現地クラブが負担したため名古屋港までの費用で済んだことなど、当時の具体的な状況が共有されました。しかし、2010 年か 2011 年頃に WCS の制度自体が廃止となり、以後は各クラブが国際奉仕を担う形になったと述べられました。

活動の課題として、寄贈した物品がその後どのように活用されているかの追跡調査が困難である点が挙げられました。実際に送った救急車が今どこにあるのか不明であり、場合によっては転売されたり、目的外使用されたりするリスクも指摘されました。また、過去には駐日フィリピン大使を招聘するために豊田工場の見学をセッティングするなど、多大な労力と費用がかかった経験も語られ、海外を対象とした大規模な活動の難しさが浮き彫りになりました。

今後の国際奉仕活動の方向性：地域密着型への転換

過去の海外支援活動における課題、特に支援後の成果検証の難しさや活動の負担の大きさを踏まえ、今後の国際奉仕活動のあり方について中心的な議論が行われました。その結果、これまでの海外へ出ていく大規模な物資支援から、活動の軸足を国内、特に自分たちの地域へ移すべきだという点で意見が一致しました。

具体的には、豊橋市内に 86 カ国もの外国人が在住しているという事実に着目し、彼らとの交流や支援を活動の中心に据える「地域密着型」への転換が強く提案されました。このアプローチは、「身近なところから小さなことからコツコツと」実践できるものであり、大規模な事業を行うのではなく、地域社会における多文化共生を促進するための「手がかり」を見つけるような活動が望ましいとされました。

この方針転換は、毎年海外へ出向くことの現実的な難しさや、活動の担い手がいなくなるリスクを回避する上でも有効であると評価されました。メンバーからは、送った物が有効活用されているか分からない海外支援よりも、目の前の地域社会で直接的な交流を図る方が、より実質的で継続可能な活動になるという賛同の声が多数上がりました。

具体的な活動アイデアと関連する雑談

今後の地域密着型活動の具体的なアイデアとして、過去に成功した交流イベントの経験が共有されました。特に、米山奨学生や海外からの留学生（ベトナム、モンゴル、中国、韓国など）を招いてバーベキューを行った事例が挙げられ、こうした直接的な交流は非常に楽しく、相互理解を深める上で効果的であったと評価されました。理科大の留学生は日本語習得が早く、円滑なコミュニケーションが可能だったことも成功要因として語られました。

一方で、地域に住む外国人が抱える深刻な問題にも話が及びました。日本語が話せないブラジル人三世が、会社から提供された住居や車で閉鎖的な労働環境に置かれ、病気になった際には日本語が話せる子供が親に病名を告知せざるを得ないといった厳しい現実が紹介され、本来の講演会ではこうした実情に踏み込んでほしかったという意見が出ました。

これらの議論から、今後の活動としては、登録料 3,000 円程度で食事会を開くなど、小規模でも継続可能な交流イベントが有効ではないかというアイデアが示されました。

本筋の議論の合間には、メンバーの父親が市議会議員選挙に 2 回立候補して落選した話や、選挙活動の裏で支援者の本音と建前を目の当たりにした経験談など、政治に関する雑談も交わされました。また、会議の文字起こしに使用されていた AI アプリ（価格約 2 万 5 千円）に興味が集まり、その機能について質問が飛び交う一幕もありました。

７番テーブル　　太田和彦会員

①2月6日国際奉仕担当例会の感想や、会員各自が普段感じているこの地域の多文化共生について、意見を交換しよう

※多文化共生とは
異なる文化的背景を持つ人々が、お互いの文化や価値観を尊重し合いながら対等な関係で共に生活していける社会を目指すという考え方のこと。

○日本は少子高齢化により、深刻な労働力不足に直面している。この問題解決のため外国人労働者への依存が急速に高まっており、コンビニエンスストアや飲食店、工場、介護施設などさまざまな職場で欠かせない存在となっている。
○外国人従業員は、英語をはじめとした多言語を話せることが多く、海外のお客様の接客、対応、通訳などに活躍されており、優秀な人材が多くみられる。
○外国人労働者だけでなく、日本で暮らす外国人、また留学生も増加している。
　教育現場でも、国際化が進み、日本語指導体制の充実や、異文化を理解する能力を育むことができ、こどもたちが共に学ぶことができる環境が必要だと思われる。
○外国人との日常的な接触が増える中、最も深刻な課題は言語の違いで、うまく意思疎通ができない、伝えることが伝わっていなかったりすることが考えられ、コミュニケーションを取ることができない。
○多文化共生社会は、一人ひとりの意識と行動から始まり、一人ひとりが関心を持って多様性を受け入れることが必要。交流やつながり、助け合いを促す環境をつくる。
○ウォーキング中、すれ違う外国市民は、笑顔であいさつをしてくれる。

① 豊橋ゴールデンRCの国際奉仕は、どのようになってゆくべきかロータリアンの視点で見た意見を交換しよう

地域での国際奉仕
○ブラジル、他国の方、含めてのチーム団体が多いスポーツを通じて、コミュニケーションを取っていくイベント、場を設ける。
　そのスポーツのルールは解っているので、言葉がなくても混じり合うことができスムーズにコミュニケーションをとることができる。
○地域の外国人住民や外国籍の生徒と交流するイベントを実施
　日本の文化（歴史、音楽、芸能など）を一緒に学ぶ機会をつくる。
○日本語がわからない、話すことができない外国人住民に、地域での日本語教室を開く。
○外国人住民自身が学ぶ努力も必要とされるが、ゴールデンRCとしても、一緒に学ぶ場を模索する。

海外への国際奉仕
○貧困率の高い国の子供たちへ、学ぶための文房具や、日本の子供たちが、使わなくなった、リュックサックやかばんなどを寄付する。
○貧困率の高い国の学校へ、学校の備品や教育に活用できるPCなどの資金援助をする。
○グローバル補助金（プロジェクトの「持続可能性」が申請条件とある）
　(提唱クラブ/地区からの拠出金と財団のWFからの上乗せ資金)を活用して持続可能なプロジェクトを継続的に行っていく。

☆ **最後に、フォーラムでの出席率が低いように思う。年間4回のフォーラム。**
ロータリークラブの奉仕活動を学ぶ大切な場でもあり、出席をして、意見交換をし、魅力的な例会を通じ、会員との親睦を深めることができる。また、この学びの場で、地域の根差したゴールデンRCの今後の魅力ある奉仕活動に繋がると考えられる。

★ニコボックス
神谷　馨・髙橋哲也：鬼頭ラーニング委員長、飯野国際奉仕委員長よろしくお願い。
伊藤角栄：ロータリーの友を発表させて頂き。
鬼頭秀幸：ちょっとためになる挨拶をさせて頂き。
飯野益通：本日のフォーラムよろしくお願い。
大須賀憲太・白井正樹・
宇藤　信・飯野益通・
村松　光・鵜殿健次・
　　猪股ソノ子：ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰをさせて頂き。

福沢省吾：入会記念日をお祝い頂き。
太田和彦：国際奉仕フォーラム飯野委員長がんばって下さい。
山口幹夫：例会参加の支援に感謝します。
髙井龍雄：(株)プライズメントおかげさまで創立25周年をむかえる事が出来ました。まさに人生の岐路でした。改めて頑張って参りたいです。
　　山下　孝ニコボックス委員長

★他クラブの例会変更
■2月23日(月)　豊橋南RC　豊橋東RC合同例会(ｻｲﾝ無)
■2月25日(水)　渥　美RC　免々田川菜の花桜まつり
　　(ｻｲﾝ：2月21日(土)RC事務所)
　　豊橋東RC　豊橋南RC合同例会
■2月26日(木)　豊　橋RC　クラブフォーラム
■2月27日(金)　蒲　郡RC　職場訪問例会
　　新　城RC　会員親睦例会
■3月3　日(火)　田原パRC　渥美RC合同例会
　　宝　飯RC　会場都合のため
■3月　5日(木)　田　原RC　シンポジウムのため